

# 物流にロボット・AI導入を検討するその前に 物流倉庫のブラックボックスを解消せよ

産業界を悩ませる人手不足問題。テクノロジーの進化に伴い、省人化の切り札として注目が集まっているのが、ロボットやAI（人工知能）などの最先端技術だ。物流現場でもこれらの最先端技術への期待が高まっているが、専門家の見解は異なる。ロボット導入を検討する前に取り組むべき課題があるという。それは、物流倉庫のブラックボックスの解消である。

今、ロボットを導入しても物流現場の課題解消には繋がらない

ロボットやAIを導入すれば、物流現場の人手不足を一気に解消できるのではないか——。そのような期待から、最先端技術の導入に関心を寄せる企業も少なくない。しかし、「物流へのロボットやAIの導入は時期尚早」と語るのは、NTTデータグループのコンサルティングカンパニー・クニエのディレクター前田賢二氏だ。

「物流は、人が介在する部分が多い領



域です。例えばピッキング作業ひとつとっても、簡単なように見えて人間にしかできません。誤配送などのミスが許されない物流の世界で省人化に寄与できるロボット技術は現段階では発展途上です。現に大手EC企業など物流先進企業は、今はまだロボット導入を考える段階になく、マテハンによる省人化を極限まで追求し、人手不足に対応しています」

むしろ先進企業の強さの根底には、庫内作業効率の可視性がある。物流の省人化を目指す企業は、ロボット導入よりも、まずはそこから取り組む必

要があると前田氏は指摘する。

「物流の中で最もブラックボックスになりがちなのが庫内です。WMS（庫内管理システム）<sup>※1</sup>を出入庫管理や在庫管理というモノの管理や、ERPと連携することによるオカネの管理に留まっている企業が多く見受けられます。しかしWMSの本来の役割はそれだけではない。実は時代が求める省人化に繋がる作業効率、生産性を知ることのできる経営ツールなのです。まずはWMSによって見えてくる情報の価値を見直す必要があります。その真価によりブラックボックスを解消し、物流情報を経営情報に昇華させることで、さまざまな経営課題にアプローチができます。将来的にロボット導入を検討するうえで、庫内情報の可視化が大前提です」

庫内可視化とKPI管理で  
物流を戦略的に管理する

庫内の作業効率を可視化し、物流を経営情報に変えていく。前田氏によ

ると、実は既に多くの企業がWMSを導入しているにもかかわらず、本来の目的に沿った運用がなされていないという。

「庫内作業情報の可視化をし、標準化を図ることで国内のみならずグローバルサプライチェーンの構築も容易になります。KPIもマネジメント階層ごとに設定し、グローバルでKPI管理を標準化していく、物流を戦略的にマネジメントしていくことが重要です。クニエの物流コンサルティングチームでは、S&OP<sup>※2</sup>のチームとも連携し経営課題に対する総合的な支援を行っています。」（前田氏）

物流を経営の力に変えるには、在庫管理や作業プロセスの標準化だけではなくはや不十分である。庫内生産性の可視化と戦略的マネジメントに取り組む企業だけが、リードする時代である。

前田賢二

株式会社クニエ ディレクター

大手物流会社で要職を歴任後、外資系コンサルティングファームにてロジスティクスプラクティスを設立、ロジスティクス戦略策定・ロジスティクスビジネスデザイナー・ロジスティクスIT導入の各プロジェクトをプラクティスリーダーとして担当。その後大手外資系3PLプロバイダーなどを経て現職。産業を問わず、各種ロジスティクスコンサルティング・物流コンサルティングを展開。

クニエはNTTデータグループのビジネスコンサルティング会社です。様々な変革に挑戦されるお客様のパートナーとして、高度な専門性と経験を有するプロフェッショナルが幅広いソリューションを提供し、お客様の変革の実現をグローバルベースで推進致します。

※1 WMS：Warehouse Management System  
※2 S&OP：Sales & Operations Planning